

つばきの下のすみれ

小川未明

青空文庫

一本のつばきの木の下に、かわいらしいすみれがありました。そのつばきの木は、大きかったばかりでなくて、それは真紅な美しい花を開きました。この花を見た人は、だれでも、きれいなのをほめないものはなかったほどであります。

「まあ、なんとというみごとな花だろう。」といって、みんなは、そのつばきの木の周囲をまわり、火のもえたつような花に見とれました。

すみれは、やはり、そのころ、紫色のかわいらしい花を咲いたのです。しかし、この大きなみごとなつばきの木の下にあつては、人の目に入るにはあまりに小さかった。あわれなすみれは、それで、心なしに歩く人々から、頭をふまれたのです。

せつかく、春に遇うて、これからはなやかな、暖かい太陽の光を浴びて、ちようや、みつばちの歌を聞いて、楽しい日を送ろうと思つているまもなく、花も、葉も、ふみにじられて、見る影もなくなつてしまいました。

それは、すみれにとつて、どんなに悲しいことでありましたでしょう。つぎの年も、またつばきの木には、真紅な大きな花が、たくさんに咲きました。人々は、みなその近くに寄つて、これをながめて、

「なんとという美しい花だろう。」といつて、ほめないものはなかつたのです。ちようど、そのとき、すみれがやつと、小さなつぼみを破つて紫色の花を開いたのです。

「ああ、なんとという私は不幸なものだろう。だれも、私に目をとめてくれるものがない。またじきに、だれかにふまれてしまう運命であろう。」と、わなわなと、身を震わしていました。

すると、この家に、竹子さんというやさしい少女がありました。やはり、裏の庭に出て遊んでいましたが、ひとり、竹子さんだけは、星のようなすんだ、うるおいのある瞳を、つばきの木の下のすみれの上にとめました。

「ここに、すみれがあつてよ。あたしは、すみれが大好きなの。こんなところにあつては、みんなに踏まれてしまうわ。」といつて、はじめて竹子さんは、すみれに注意してくれました。

すみれは、どんなにうれしく思つたでしょう。心の中で、ほんとうにお嬢さんに見つけられなければ、また人に踏まれてしまうか鶏につつかれて、芽を出したかいもなく、見る影もなくなってしまうものだと思ひました。

「あたしは、すみれを鉢に移してやりましょう。」と、竹子さんはいつて、すみれをば地

面から離して、素焼きの鉢の中に移しました。すみれは、自分の生まれ出た地面から離されることは、たいそう悲しゆうございました。もう二度と太陽の光は見られないんでな
 かるうか、そして、あの夜々に、大空に輝く大好きな星の光を望むことができないので
 なかるうかと、愁いしましたが、また、やさしいお嬢さまのなさることだと、安心をして
 いました。

竹子さんは、すみれの植わった鉢を、自分の勉強する机のそばに持つてきました。
 すみれはそこで、目ざまし時計や、きれいな表紙のついている雑誌や、筆立てや、また、
 竹子さんが、学校で稽古をなさるいろいろな本などを見ることができました。しかし、
 この生活は、すみれにとつて、あんまり好ましいものではなかったけれど、つばきの木
 の下にいて人間に踏まれたり、鶏につつかれたりすることを考えたら、とても比較にな
 らぬほどしあわせなことでありました。もしここで、太陽の光と、星の輝くのが見られ
 そして、みつばちや、ちようがきてくれたなら、すみれは、おそらくこんなに安全な生
 活はなかつたのでありましょう。

すみれの花は、しばらくの間は、竹子さんの机のそばで咲いていました。竹子さんは、
 水をやることをけつして怠りませんでした。そして、いつしか、すみれの花も終わりに近

づいてきました。すみれは、そのころは、もう家のうちの生活にあきてしまつて、ふたび、大地の上に帰りたいと思う心が、しきりにしたのでありました。

「お母さん、すみれの花は、もうおしまいですね。」と、ある朝、竹子さんは、お母さんに向かつて、いいました。

「ああ、もうおしまいですよ。」と、お母さんは返事をなさいました。

「これを地面におろしてやりましょうね。」と、竹子さんは、またお母さんに聞きました。

「そうです。来年、また、花が咲くから、おろしておやりなさい。」と、お母さんは、答えられました。

「どこが、いいでしょう。」

「いつかあつたところが、やはり地が、すみれに合つていいでしょう。」

すみれは、竹子さんと、お母さんの話を聞くと、ふたたび大地に帰られるのを知つて、うれしくてたまりませんでした。

竹子さんは、すみれをもとはえていたつばきの木の下におろしました。そして、人間にふまれたり、鶏につつかれないように、棒を立て、すみれを保護したのでありました。すみれは、そのことをどれほど深く、ありがたく思つたかしれません。

すみれは、安心あんしんして、長い月日ながつきひを送りおくました。秋あきがきたときに、葉はは枯かれ、そのうち
 に冬ふゆとなつて雪ゆきが降ふつて、地面じめんも、つばきの木きも、みんな、雪ゆきの下したになつてしまいました。
 明あくる年としの春はるのことであります。つばきの花はなが、真紅まつかさに咲さく時分じぶんに、やはりすみれも紫むらさき
 の花はなを開ひらきました。しかし、去年きよねん、竹子たけこさんが棒ぼうを立ててくれたましたので、いまは、人ひと
 にふまれたり、鶏とりにつつかれたりする心配しんぱいはなくて、まことにすみれは安心あんしんして、太た
 陽いようの光ひかりを浴あびて、のどかな日ひを楽たのしむことができたのです。

「これも、みんなお嬢じやうさんのごしんせつからだ。」と、すみれは思おもいますと、一時じも早はやく、
 やさしい竹子たけこさんの姿すがたを、見みたいものだと思おもつたのです。

すみれは、竹子たけこさんの姿すがたを慕あこがい、憧あこがれましたけれど、やさしい少しょう女じよの姿すがたは、ついに
 庭にわには現あらわれなかつた。それもそのはずのこと、竹子たけこさんは、雪ゆきのまだ消きえないころに、叔お
 父じさんにつれられて、都みやこの学がっこう校こうへゆかれたのです。

すみれは、なに不足ふそくなかつたけれど、ただお嬢じやうさんの姿すがたが見みられないのを悲かなしんでいま
 した。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「小学少女」

1922（大正11）年4月

※表題は底本では、「つばきの下《した》のすみれ」となっています。

※初出時の表題は「椿の下の堇」です。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年11月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

つばきの下のすみれ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>